

東京教区 同朋社会推進ネットワーク通信

しゃばネット

教法からの呼びかけと、現在の課題からの問いかけの交差する一点に、身をおく



阪神・淡路大震災「1.17の記憶」
神戸市東灘区深江本町阪神高速倒壊現場
(1995年1月18日撮影)
写真提供：神戸市

2022. 8

Summer

No. 136

しゃばネット

栃木組坊守研修会

災害に関する映像視聴と防災についての話し合い

栃木組 坊守会長

明覚寺 小野 佳余子

1995年1月17日早朝、淡路島を震源とする阪神淡路大震災が発生しました。あれから26年後の震災の日、ある新聞記事を目にしました。

一炎の中から兄の叫び。阪神大震災4児の母

「つらいけど、忘れたくない」

—
どんな時も優しかった9歳の兄は炎の中で声を上げながら亡くなった。神戸市兵庫区にあった自宅で被災した茂森美香さん（34）は当時8歳だった。あの日、住んでいた6階建てマンションは横倒しになった。6階の自宅で並んで寝ていた母の坂本和子さんと兄・篤弥人（すみと）さんが和だんすの下敷きになった。窓側にいた茂森さんは奇跡的に無傷で、真ん中に寝ていた和子さんも近所の人に助け出された。だが、一番奥にいた篤弥人さんが取り残された。火の手が迫っていた。

暗闇から、篤弥人さんの「お母さん！」「助けて！」という声が響いていた。

和子さんが「すみと！すみと！」と叫んだ。茂森さんも炎の中に走ろうとしたが、近くの大人に止められた。兄の叫びは「熱いー！」に変わり、やがて聞こえなくなった。1カ月後、焼け跡から遺骨だけが見つかった。

「情に篤（あつ）く、生まれた3月（弥生）のように温かい人になって」和子さんがその名に願いを込めた篤弥人さんは、いつも茂森さんのそばにいた。一緒に学校へ通い、家に帰った。毎日行く駄菓子屋で茂森さんが「ほんまはこれも欲しいねん」と言えば、自分の

100円玉をくれた。仕事で不在がちな母に代わり、怖かった夜のトイレに付き添ってくれた。

「一度も怒ることがなかった。けんかもない。ただただ優しかった。」その兄の声が次第に聞こえなくなっていった恐ろしさ、悲しみと喪失感は、26年たっても少しも変わらない。

だが、震災で日々の暮らしは大きく変わった。母から時折、「あんたが死んだらよかった」と言われ、ベランダから落とされそうになったこともある。荒れた母に嫌気がさし、震災から4年後、12歳で家を出た。年齢を偽って飲食店で働き16歳で結婚、長男を産んだ。

9年前、止まったままの兄の年齢を、長男が超えた。「不思議な気持ちでした。兄を亡くした母の悲しみが少し分かった気がして」縁を絶つことはなかった母は6年前に病死した。

テレビの緊急地震速報の音を聞けば冷や汗が出る。台風が来ると眠れない。「災害の怖さが染みついているんです。」そして大切な人を失う悲しさ。「いろいろ考えると、忘れちゃいけないと思います。いつまでたっても大切な日です。」

（毎日新聞2021年1月17日より）

自然現象によってもたらされる「天災」で、こんなに悲惨で辛い経験をして、癒えない悲しみを抱えて生きている人がいることに胸が苦しくなりました。

これからも地震・水害・あらゆる災害はやってきます。もしもの時、周りの大切な人を守れるか、自分自身も守れるか、自分に何ができるのか、お寺で何ができるのか、地域で



阪神・淡路大震災「1.17の記憶」

神戸市兵庫区会下山付近

(1995年1月18日撮影)

写真提供：神戸市

※毎日新聞の記事とは関係ありません

何ができるのか……。いざという時に備えることで、被害を少しは減らすことができるかもしれないし、悲しみを少しでも減らすことができるかもしれません。その思いから、先日、栃木組坊守研修会で「災害に関する映像視聴と防災についての話し合い」をしました。災害を想定した訓練映像の視聴は実際の場面をイメージしやすく、取り組むべき対策が見えてきます。

【個人でできる対策】

家具の置き方、備蓄品の用意、非常用持ち出しバッグの準備、避難場所や避難経路の確認。

【お寺として考えておくこと】

自坊を避難所にできるのか、どんな支援が

できるのか。もし水が出なくなった時はどうする？どんな食糧備蓄品が必要？避難場所として提供できなくても、心のケアになる憩いの場を提供することもできる。

このような意見交換をし、各寺院単位ではなく、組のネットワークで助け合えることも確認しました。

災害はいつ、どこで起こるかもわかりません。定期的に、「災害に備える」ことについて、確認、点検し、いざという時に少しでも被害を減らし、少しでも悲しい思いをする人が減るように、今後も防災対策に努めようと思っています。

同朋社会推進ネットワーク委員

栃木組 慈願寺 那須 恵

東日本大震災後、同朋ネットのボランティア活動に参加したことがきっかけとなり、同朋ネットに加わりました。メンバーとなるから、大地震や水害などたくさんの災害が起こっていますし、“現実は想像を超えてやってくる”と、実感しています。穏やかな生活がどれだけ有り難いことなのか、多くの人が感じているのではないのでしょうか。

私に何ができるのか、同朋ネットの活動をどのように進めるのか、メンバーと話し合いを重ねている中、ある日、栃木組坊守会から研修会の案内が届きました。内容は、『防災についての話し合いと映像視聴』でした。参加者皆さんが真剣で、感想を言い合ったり疑問を投げかけたりと、有意義な時間となりました。栃木組坊守会にはグループラインがある

ので、災害時もそれを活用し、状況を伝え合ったり援助しあったりしようと確認しました。いざというときに助けられる・助けてもらえるという安心感や信頼感は、とても大きいと感じています。いざというときのための備蓄品やトイレ問題は、坊守ならではの視点が必要なことも多いと思います。組内に災害時のことを一緒に考えてくれる仲間が居ることはとても心強いことです。

研修会を計画し、中心となって動いてくださった坊守会長の小野佳余子さんは、同朋ネットの災害演習「一私が被災したときお寺で出来ることを考える」にも参加してくださいました。今回のことで、組内での災害時ネットワーク作りは大切であることを実感しました。それぞれの組がこのことに取り組み、それが教区内の災害時ネットワークにつながっていけば、いざというときの大きな力になると考えています。

今号掲載の阪神・淡路大震災の写真は、『阪神・淡路大震災「1.17の記録」』として、神戸市のオープンデータとして公開・提供されているものを使用しました。



<http://kobe117shinsai.jp/>

編集後記：

地震、豪雨、豪雪、土砂災害、台風、噴火、猛暑…災害列島・日本。いつなんどき災害に遭遇するかわからない。

この度の栃木組坊守会の取り組みは、同朋社会推進ネットワークが願っていた以上の取り組みであり、教区および宗門全体に波及し、より一層の災害ボランティアネットワークの構築が進められることが求められていると感じる。(本田彰一)

発行

同朋社会推進ネットワーク
(東京教区教化委員会内)
東京都練馬区谷原 1-3-7
電話 03-5393-0810
eメール office@ji-n.net

【メールニュース】

同朋社会推進ネットワークでは定期的に「メールニュース」を配信しています。右 QR コードのメールアドレスにお申込みください。



office@ji-n.net